

■ 鳴海宿(西)コース 史跡・文化財・その他散策案内

東海道 鳴海宿 (とうかいどう なるみしゆく) 《東コースで解説》

① 名鉄鳴海駅 (めいてつなるみえき) 《東コースで解説》

② 浅間神社 (せんげんじんしゃ) 《東コースで解説》

③ 扇川 (おうぎかわ) 《東コースで解説》

④ 復元高礼場(ふくげんこうさつば)札の辻跡 《東コースで解説》

⑤ 来迎山 誓願寺 (せいがんじ) 西山浄土宗(緑区鳴海町根古屋16番地) T E L 052-621-3522

天正元年(1573)に創建、千代倉家の菩提寺で僧俊空の開山。本堂は間口七間奥行七間半寄棟造桧瓦葺。前面に向拝が付く。本尊は本像阿彌陀如来像。千代倉家から移築された山門をくぐると境内に芭蕉ゆかりの供養塔や御堂があり、下郷家の墓地と鳴海俳諧塚(鳴海俳人の句碑や墓碑)や代官の雄水清八郎重治を顕彰した碑(雄水君徳政碑)がある。また庚申年に古い観音堂がある。

鳴海俳諧塚

境内芭蕉堂前東向き 北側 螺巖塚(ちようら 東店始祖) 南側 山父塚(さんぶ 源十郎家始祖)
墓地内墓碑 蝶羽(ちようう 三代秀雄俳名) 亀世(きせ 四代元雄) 常和(じようわ 五代昌雄俳名)

芭蕉堂と芭蕉最古の供養塔

芭蕉堂は誓願寺境内にあり間口一間半の本像瓦葺きの土壁のお堂である。安政五年(1858)冬に荷風の曾祖父に当たる永井士前(1807～88)らが建立。本尊は高さ三十八厘の芭蕉座像で細根山の寂照庵に安置されていたもの。堂の入口には「芭蕉堂」(瑞泉寺春舟和尚書)の扁額と中には「翁堂」の扁額と「鴨」の額が置かれている。この像は細根山の芭蕉お手植えの杉の木で、台風で倒れた古木を名古屋の仏師嘉右衛門が彫刻したと伝えられ、一方は寛政七年(1795)その余材を大高の篆刻家墨山(余延年)が貰い受け、二体を刻みその一体(立像)は井上土朗によって名古屋松原の東輪寺に納められ戦災で消失したので、この像は貴重な縁ある翁像である。《拝観は要予約》 供養塔は芭蕉堂の東南脇の本立の中にあり、碧色の自然石に「芭蕉翁」裏面に元禄七年(1694)甲戌十月十二日の没年月日に刻まれ、下里知足ら鳴海進來によって亡くなった翌月の忌日に、如意寺で追悼会が催され建碑されたものである。後年千代倉の菩提寺の誓願寺に移された。

⑥ 庚申山 円道寺 (えんどじ) (庚申堂) 曹洞宗 (緑区鳴海町根古屋18番地) T E L 052-621-0089

文禄年間(1592～95)の創建で瑞泉寺十一世仁甫和尚の開山。庚申山鎮堂寺と称していたが宝暦七年(1757)には松村に移転し現在の祇園寺となった。一方旧地には地藏堂があつて安永三年(1774)に庚申堂と改称し後に円道寺となり現在に至っている。本尊は背面金剛童子(庚申)。屋根に「見ざる」「聞かざる」「言わざる」の三猿が彫えられている。寺前の坂を庚申坂という名称はこの堂名に由来する。

⑦ 鳴海城跡 (なるみじょうあと) (根古屋城跡) 《東コースの天神社で解説》

⑧ 本陣跡 (ほんじんあと) (緑区鳴海町根古屋)

鳴海本陣は寛永十年(1633)ころ設置され代々西尾家が勤め、幕末には下郷家が継いだ。宿村大概概によれば敷地六百七十八坪に建坪が二百七十三坪であり東海道から扇川までかなり広大な建物であった。最近まで建物の一部が残っていたが今は無い。なお本陣は本町に二軒(銭屋新三郎家、大和屋左七家)あった。

⑨ 頭護山 如意寺 (にょいじ) (始地藏) 曹洞宗 (緑区鳴海町作町85番地) T E L 052-623-9168

康平二年(1059)に開山。創建時には青鬼山地蔵寺と言い上の山方面にあったが、弘安五年(1822)長母寺の無住国師が現在地に移転再興。応永二十年(1413)現在の山号寺号となった。本尊は伝定朝作の一丈六尺地蔵菩薩で、普正月に歩射の行事で蛤を放生したので蛤地藏の名がある。また江戸時代時の鐘を鳴らし別名鳴海寺とも。本堂、地藏堂のほか門前に弘法堂と中に咳地藏と十王像がある。

⑩ 扇川土塲跡と郷藏跡 (おうぎかわとばとごうくらあと) (緑区鳴海町作町)

鳴海川の右岸の右岸に戦後しばらく土塲とって船からの荷揚げ場(波止場)があった。江戸時代には湊があり、ここから小船で保田(現名古屋港)まで運び、千石船に積替えて江戸まで荷(主に酒、穀り)を運んだ。岸辺には尾張藩の年貢米を取る郷藏があった。明治になって鉄道が普及するまで桑名、四日市、鳥羽方面に船運が盛んになり、また昭和三十年頃までは夏には海水浴客を運んだ。

⑪ 花井の井戸跡 (はないのいどあと) (緑区鳴海町三皿)

鳴海城主安原備中守宗範の家臣伊勢木右衛門の屋敷にあった井戸で、桔梗が生えて花が咲いていたので花井と言われる。名泉として知られ江戸時代は酒造用として使い、つい最近まで近くの住人の飲み水として重宝されていた。

⑫ 護国山 東福院 (とうふくいん) 真言宗智山派(緑区鳴海町花井町3番地) T E L 052-621-0712

本尊は大日如来像で脇に不動尊が祀られてある。元は赤塚にあったが兵火により焼失。その後森下を経て寛永年間(1614～44)中興の祖盛井法印が廃院になった鳴海城の廃村で現在地に再建し、今の山門が遺物のことである。山門の横に観音堂があり縁丈門で扁額も残されておりお子さん観音として参詣者が多い。

⑬ 花井の間屋場跡 (はないのとんやばあと) (緑区鳴海町花井町)

東の間屋場に対し西の間屋場といい、鳴海には最初花井の児玉家が交差点西北の地に勤め、一ヶ所だけであったが江戸後期天保の頃(1830～44)東の間屋場が出来、月番交替で勤めるようになった。この児玉家の当主源右衛門重長は芭蕉の鳴海の六俳仙の一人であった。

⑭ 白龍山 長翁寺 (ちようおうじ) (織田薬師) 曹洞宗(緑区鳴海町花井町甲50番地) T E L 052-891-2931

古くは薬師山にあり天正年間(1573～92)に現在地に移転、瑞泉寺十世海雄主禅和尚の開山。本尊は釈迦牟尼仏(本像伝行基作)。薬師堂の薬師如来像は織田信長の守護仏と言い伝えられ、俗に「織田薬師」と呼ばれ一族の織田長益有楽斎が堂宇を建て祀ったもので、寺の移転とともに移設されたものである。東海四十九薬師第三十四番

⑮ 成海神社 (なるみじんじや) (緑区鳴海町乙子山85番地) T E L 052-891-2830

朱鳥元年(686)の創建で熱田神宮と同時代の鎮座。鳴海の氏神として「東宮さん」と古くから尊崇。応永元年(1394)に根古屋(鳴海)城の築城のため現在地に移転。毎年十月十日前後の日曜日に秋の大祭で神輿、山車四台の奉納のほか日本武尊の故事に纏わるお舟流しの神事が行われる。本殿は延宝五年(1677)建立の三間社流造りのものであったが創祀千三百年祭に鑑み昭和六十一年(1986)に新拝殿、参集殿、裏廟の新築と本殿、直来殿などの修築を式年大祭を斉行し現在に至る。境内は一万三千坪ありかなり広く、古いお宮なので水上市上、源太夫社、八幡社、北野社等の末社や東宮稲荷や常夜灯が多くある。また中島邸にあった茶人下村西行庵の茶室遊心席亭と芭蕉の句碑(翁塚)「初秋や海も青田の一みどり」がある。

⑯ 鳴海陣屋跡 (なるみじんやあと) (代官所跡) (緑区鳴海町森下)

江戸中期天明二年(1782)に尾張藩の地方役所、鳴海(森下)陣屋が設けられ、初代代官飯沼定右衛門、手代四人、足輕三人が定詰めし、年貢徴収、寺社関係の行政、土木、追捕、訴訟業務に従事した。鳴海代官は大代官で鳴海村から愛知郡東南部、知多郡東半分を取めた(百二十一ヶ村支配、石高七万二千石)。

⑰ 一国山 光明寺 (こくみょうじ) 曹洞宗 (緑区鳴海町丹下26番地) T E L 052-891-0004

当初鎌倉海道筋の三王山の東にあった真言宗清水寺を弘治二年(1556)現在地に移転、瑞泉寺九世圓庵洞金大和尚が開山となり伽藍を再興し曹洞宗光明寺に。本尊は子安地藏大菩薩、弘法大師の御作との言い伝えがある。付近には丹下砦跡、清水寺遺跡、鳴海陣屋跡などの史跡がある。

⑱ 丹下砦跡 (たんげりとあと) (子安地藏) 曹洞宗 (緑区鳴海町丹下、清水寺)

光明寺から裏手の清水寺遺跡にかけて、織田信長が永禄二年(1559)三月に築いた今川義元の上洛に備えるため、善照寺、中島、鷺津、丸根など一連の砦の一つである。東西八十四米、南北七十八米で信長公記によれば水野常刀、山口海老之丞、石植玄蕃らが勤めた。

⑲ 清水寺遺跡 (せいのすいじいせき) (緑区鳴海町清水寺)

貝塚、住居跡、釜など縄文期から室町期にかけて各時代の遺物を出土する複合遺跡である。貝塚は縄文中期、弥生中後期の土器類が発見され、弥生後期の竇穴式住居跡や古墳、丹下砦の溝など遺構、遺物が多い。

⑳ 西の常夜灯 (にしのじょうやとう) (秋葉灯籠) (緑区鳴海町丹下)

寛政四年(1792)宿場町の西の入口に建てられた後に現在地に移転された。旅人の目印や宿中安全、火災厄除の難を逃れる為の秋葉社を祈願したもの、石灯籠の四面には「秋葉大権現」「新馬中」「願主重因」「寛政四〇口二月」と彫ってあり東海道の伝馬制度の馬方衆である重因と言う奇進者の名がある。東の入口と同じく戸と立場があった。

㉑ 雄本朗造博士銅像 (きじもとときざうはかせどうざう) (緑区浦里一丁目浦里公園内)

鳴海小作争議の理論的指導者で京都大学教授であった雄本朗造博士の銅像が浦里公園の北西角に建っている。小作争議は大正六年(1917)十二月から始まり、翌年小作人と地主方と裁判になり雄本博士の永小作権の理論により裁判は長引いたが大正十二年三月和解が成立した。しかし途中博士の瀬戸内海での不慮の死があり、農民有志が遺徳を偲び、昭和五年(1930)一望する石堀山に銅像を建立した。戦後都市化の波にのまれ区画整理され、昭和四十八年争議発生の地の浦里公園に移転された。

㉒ 鉾の木貝塚・遺跡 (ほこのききいつか・いせき) (緑区鳴海町鉾の木)

貝塚は東海道筋にあり昭和五年野村三郎氏の発見で遺物は縄文前期に属する土器で上下二層の間に相違があり上層は爪形文、羽状縄文をもつ土器(鉾の式)を主体とし、下層からはやや厚手の縄文のある土器と薄手の御線文土器が出土している。東に百米程山を上った鉾の本遺跡はこの地名の由来でもある日本武尊が鉾を松の樹上にかけて休憩されたところと言われ、弥生式土器の破片なども散財していた。

㉓ 千鳥塚 (ちどりつか) (緑区鳴海町三王山千句塚公園内) 名古屋市の史跡

日本最古の翁塚で松尾芭蕉存命中唯一のものである。千句塚公園として整備された一角に、大きな桜の樹下に高さ五十厘程の石碑が建立している。貞享四年(1687)十一月七日に地元鳴海の六俳仙の一人であった寺島安信宅で、歌仙「星綺の闇を見とや啼く千鳥」の巻が終わりになったのを記念して、三王山に建立されたもので、文字は芭蕉直筆で表に「千鳥塚」下に二行で「武城江東散人」「芭蕉桃言」と刻み、裏面に「千句塚」と六俳仙の名「知足軒寂照」「寺島美言」「岡 安信」「羽守守自笑」「元玉重慶」「沙門如月」と側面に「貞享丁卯年十一月日」と興行の年月が彫られている。

㉔ 緒畑稲荷神社 (おばたいなりじんじや) (緑区鳴海町三王山)

創建は室町時代に伊勢の緒畑原から勧請された社、祭神は倉稲魂命の女神様で、五穀豊饒を願う農耕神である。桶狭間の戦禍に遭い、その後この地に帰依するところとなり靈験あらたのため遠近より祈願者が多い。碑石の多いのは修験者が魂として祀る風習からである。境内には樹齢四百年以上の楠木が二本仲良く寄り添って夫婦円満の靈験ありと言われている。

㉕ 大塚古墳と赤塚古墳 (おおつかこふんとあかつかこふん) (緑区鳴海町赤塚)

大塚古墳は新海池の西岸にあった赤塚古墳群の中心、東向きの緩斜面に築造された円墳で直径二十米、横穴式で石室(玄室)は二穴連続式で天井石は取去られていて側壁のみ残っている。昭和五年の探掘調査では人骨、金環、鉄鏃、須恵器等が出土した。現在は被覆されて石壁は見られない。赤塚古墳は大塚古墳の南方五十米にあり現在は住宅に囲まれて石室(玄室)の基礎石のみが残されている。

㉖ 新海池 (にいのみいけ) (緑区鳴海町池上)

緑区は江戸時代灌漑用水が不足で各地にため池が造成され寛永十一年(1634)頃には一度に十二の池が完成し、その一つで周囲千六百八十五米、面積十萬三千平方メートルの池で緑区では一番大きい。新海五平治が尽力して藩の許可を取って造成してその名が付いた。明治になるまで彼の功績を讃えて受益の農民は毎年稲一束を子孫の家に収めていた。近年池の周りを公園として整備がなされ市民の憩いの場所になっている。

㉗ 古鳴海八幡社 (こなるみはちまんじや) (緑区鳴海町上ノ山)

元は神明社で備前検地で縄線であったから室町末期以前の創建の社、明治になって八幡社と合祀されて社地は神明社で名を八幡社にした。祭神は天照大神と応神天皇である。戦後整備され社殿、鳥居、灯籠、手水場は近代化され昔の面影は無い。

㉘ 薬師山 桂林寺 (けいりんじ) 曹洞宗 (緑区鳴海町古鳴海47番地) T E L 052-891-0484

明暦二年(1656)真言宗の薬師堂として開山された。安永五年(1776)八事の仏地院住職の物道和尚が隠居して薬師堂に入り曹洞宗に改宗し、明治になってから尼僧が守ってきたが今は住職が居られる。戦災で全焼したが立派に再建され、「高嶽」伝説の平清盛より下賜された阿彌陀如来像が安置されている。本尊は東方薬師瑠璃光如来。古鳴海の鎌倉海道沿いにあった文政八年(1825)の道祖神の道しるべが祀られている。

㉙ 地下鉄野原駅 (ちかてつのなみえき) (天白区野原)

野原は天白川中流左岸にあり古代から中世にかけては鎌倉海道が通る交通の要衝で、ここで海路は舟や徒歩で対岸に渡り熱田へ、一方陸路では迂回して八事、井戸田を経て熱田方面に通じていた上野道があった。江戸時代は尾張藩の鳴海代官所の管轄で熱田の大官司千秋家領として諸役免許の地でもあった。

名古屋地下鉄鉄道線の東南の終点駅で緑区の鳴子団地を始め住宅地の玄関口だった。平成二十二年度に徳重方面への延伸工事が完了した。

参考資料

緑区誌、名古屋区誌シリーズ緑区の歴史、緑区の史蹟、名古屋市の史蹟と文化財、名古屋市史、中日新聞、朝日新聞、緑区ホームページ、愛知県の歴史散歩、愛知百科事典、角川日本姓氏歴史人物大辞典、芭蕉全集、尾張名所図説、細根山小山園等